

【研究報告】

看護師の身だしなみに対する患者の見解

長谷部佳子* 浪久 知子**

【要 旨】

看護師の身だしなみに関する患者の見解について、外来患者を対象に調査した。調査項目は、ユニフォームの印象について4項目（シミや汚れ、臭いの有無、着こなし、清潔感）と、看護師に望む服装と身だしなみについて13項目（ユニフォームの色、シミや汚れ、薬品や汗などの臭い、下着、スカート丈、ストッキング、髪型、髪の色、化粧、アクセサリ、口臭や体臭、洗濯・クリーニング）の合計17項目とし、3件法で回答を求めたほか自由記述の欄を設けた。調査票を配布し回収できた127名を解析対象（平均年齢49.8歳±標準偏差17.2歳）とし、単純集計と χ^2 検定またはFisherの直接確率検定を行った結果、ユニフォームに対して患者が抱いていた印象は、清潔度や着こなしなどに関しておおむね良好であった。ユニフォームの色については「白以外でもよい」との回答が過半数を占めたほか、スカート丈や化粧、髪型、髪の色などの項目で、従来に比較すると看護師の自由を許容する割合が漸増していた。しかし、香水や口臭、薬品・汗などの臭いが付いたユニフォームの着用など臭いに関する項目や、アクセサリ・マニキュアに関する見解は好意的ではなく、経年的な変化はみられなかった。また、シミや汚れの付いたユニフォームの着用も容認できないとする意見が過半数を占めた。これらの結果から、患者は看護師に職業人としての清潔感のある身だしなみを求めていることが明らかになった。

【キーワード】身だしなみ、ユニフォーム、患者の見解、清潔感、看護教育

I. はじめに

看護師のユニフォームは少なくとも明治20年代に取り入れられており^{1, 2)}、「時代の最も先端をゆくものとして出発した」²⁾と言われており、ユニフォームの導入は日本の洋装史上でも特筆すべき出来事であった。その後のユニフォームは、形状や色、および髪型なども含めてより機能的で活動的なスタイルの追求という見地で変遷を遂げてきた。Kalishらがユニフォームの果たす役割について「服装の変化は新しい看護の役割に対する認識を助ける」³⁾と述べたごとく、外観よりも看護実践をアピールする目的で、ユニフォームの自由化や白衣ではないユニフォームの導入に踏み切った病院^{4, 5)}は漸増しつつある。

史実によれば、看護師の当初のユニフォームは紺色であり、白色に変わったのは明治43年のことである¹⁾。日本ユニホームセンターではこの変化を清楚に業務を完遂する必要性からではないか¹⁾と解釈しているが、

ユニフォームの色を取り上げてみわかるように、ユニフォームには着衣する者の意識のみならず、その着衣を容認する社会的な価値観も反映される。近年は医療制度改革や診療報酬改定の流れの中で患者が病院を選択する時代でもあり、患者満足度調査には看護師の身だしなみに関する評価も含まれる。看護教育に携わる者として学生達に専門職業人に求められる装いについて働きかけていく関係上、看護サービスの受け手である患者が看護師のユニフォームや身だしなみについてどのように考えているのかを定期的に把握する必要がある。そこで、身だしなみ全般に対する患者の見解を把握し看護教育に反映させる目的で、外来患者を対象に質問紙調査を行った。

II. 研究方法

1. 対象および施設

* 日本赤十字北海道看護大学 ** 東京慈恵会医科大学

2001年11月から12月の期間中、関東圏におけるA病院外来受診者のうち、口頭で研究目的を説明し、同意の得られた患者130名とした。本研究は施設長から文書による調査研究の承諾書を得て実施した。

2. 調査方法

1) 調査票と回収方法

調査票は、プレテストでの結果を考慮しながら無記名自記式のものを研究者らが独自に作成し、外来診察が終了した患者に対して趣意書を添えながら口頭で調査を依頼した。調査票は厳封された状態のものをその場で回収した。回収率は97.7%であった。

2) 調査項目

看護師のユニフォームの印象について4項目(シミや汚れ、臭いの有無、着こなし、清潔感)と、看護師に望む服装と身だしなみについて13項目(ユニフォームの色、シミや汚れ、薬品や汗などの臭い、下着、スカート丈、ストッキング、髪型、髪の色、化粧、アクセサリ、口臭や体臭、洗濯・クリーニング)の合計17項目とした。これらの項目はいずれも3件法で回答を求めた。例えば、「看護師のユニフォームは(清潔に見える・不潔に見える・特に気にならない)」などであった。そして最後に、看護師の身だしなみに対する自由記述の欄を設けた。

3. 分析方法

単純集計および、対象者の属性と調査項目との関連について χ^2 検定またはFisherの直接確率検定を行った。

III. 結 果

1. 対象者の属性

調査票を配布し回収できた127名(男性53名、女性71名、不明3名)の平均年齢は49.8歳(標準偏差±17.2歳)、男女別の平均年齢はそれぞれ50.2歳(標準偏差±16.4歳)、女性49.2歳(標準偏差±18.2歳)であり、年齢構成を図1に示した。調査票への記入漏れはほとんど認められなかったことから、解析対象は127名全員とした(有効回答率100%)。

2. ユニフォームの印象

看護師のユニフォームの清潔度に関して、「清潔に見える」と回答した者は87名(69.6%)、「不潔に見える」1名(0.8%)、「特に気にならない」は37名(29.6%)であった。美観に関しては、「シミや汚れが目立つ」と回答した者は8名(6.5%)、「シミや汚れが目立たない」33名(26.8%)、「特に気にならない」82名(66.7%)であった。

臭気に関しては、「特に臭いはしない」82名(67.2%)、「臭いについての関心を抱いたことがない」38名(31.1%)、「汗や汚物、薬品、香水などの不快な臭いがする」2名(1.6%)との回答であった。着こなしについては、「上手だと思う」77名(64.2%)、「下手だと思う」6名(5.0%)、「関心がない」37名(30.8%)という結果であった。

ユニフォームに対する印象は、回答者の性別で異なることがなかった。ただし、「上手だと思う」と評価した回答者はおおむね「清潔に見える」あるいは「気にならない」と回答する割合が高いのに対して、「下手だと思う」と評価した回答者は1名のみであったものの、ユニフォームが「不潔に見える」と回答していた。なお、「不潔に見える」理由の1つとして、「汗や汚物、薬品、香水などの不快な臭いがする」が回答として挙がっていた。

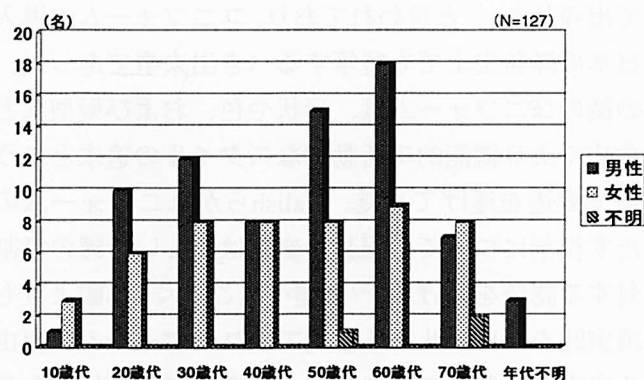


図1 回答者の性と年代。50歳代と60歳代の占める割合が高いが、年齢層によって性が異なることはなかった。

3. ユニフォームや身だしなみに対する患者の見解

1) ユニフォームの色

「白がよい」と回答した者は40名(32.0%)、「白以外の色でもよい」と回答した者は85名(68.0%)であった。「白がよい」とする回答は、回答者の年齢層が60歳代

以上になるほど高くなる傾向があった。

2) スカート丈やストッキングなど

スカート丈については、「長めが好ましい」は27名 (21.6%)、「似合っていればそれでよい」94名 (75.2%)、「関心がない」4名 (3.2%) であった。スカート丈に対する意見は性差があり、女性は男性よりも「長めが好ましい」と回答する割合が多かった。

ストッキングの色は、「個人の判断に任せてよい」65名 (51.6%)、「白がよい」55名 (43.7%)、「関心がない」6名 (4.8%) であった。40歳未満の回答者で「個人の判断に任せてよい」と回答する割合が高いのに比して、40歳以上の回答者では「白がよい」と回答する割合が高かった。ストッキングの伝線については、「とても気になる」55名 (44.0%)、「それほど気にならない」51名 (40.8%)、「関心がない」19名 (15.2%) という結果であった。ストッキングの伝線が気になる傾向は、スカート丈は長めがよいと回答した患者で有意に高くなっていった (Fisherの直接確率0.016) ほか、ストッキングの色は白がよいと回答した患者でも有意に高いことが明らかになった (Fisherの直接確率0.017)。

3) シミや汚れ、臭い、下着が透けること

シミや汚れの付いたユニフォームに関しては、72名 (59.0%) が「着用するべきではない」と回答し、39名 (32.0%) が「状況に応じて着用可」、11名 (9.0%) が「気にならない」と回答した。薬品や汗などの臭気が付着したユニフォームに対しては、65名 (52.4%) が「ある程度許容できる」と回答し、53名 (42.7%) が「すぐに着替えるべき」、6名 (4.8%) が「関心がない」と回答した。表1に示すように、シミや汚れの付いたユニフォームに対する許容度は、その他の項目に関する許容度と多くの関連を認めた。なお、ユニフォームの洗濯・クリーニングについては、「個人の判断に任せる」が65名 (52.8%)、「毎日行って欲しい」が57名 (46.3%) を占め、無回答は1名 (0.8%) であった。

臭気が付着したユニフォームの着用に対する許容度には性差が認められた (図2)。また、臭気の付着したユニフォームの着用に対する許容度とシミや汚れの付着したユニフォームの着用に対する許容度は関連していた (表1)。

下着が透けることに関しては、「個人の責任で色や柄

を選択するべき」という回答が80名 (67.2%)、「病院でルールを設けるべき」23名 (19.3%)、「気を遣う必要はない」が16名 (13.4%) という結果であった。「個人の責任で色や柄を選択するべき」と回答した患者では臭気の付着したユニフォームをある程度許容できると回答した割合が高く、「病院でルールを設けるべき」と回答した患者では臭気のあるユニフォームはすぐに着替えるべきだと回答する割合が有意に高かった (表1)。

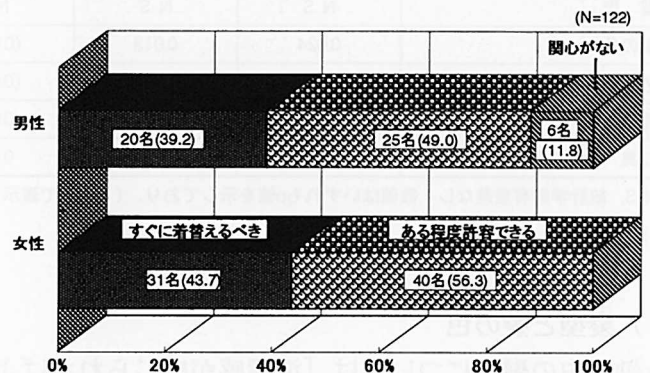


図2 薬品や汗などの臭気が付着したユニフォームの着用に対する意見。女性では「すぐに着替えるべき」という回答が多く、性差が生じていた ($\chi^2=8.79$, $p=0.012$)。

4) 化粧

化粧については、「ユニフォームに似合う程度が好ましい」71名 (59.7%)、「しないほうがよい」45名 (37.8%)、「関心がない」3名 (2.5%) という結果を得た。図3に示すように、ユニフォームの臭気を気にしたことがあるかどうかと化粧への許容度は関連していた。同様に、化粧への許容度とユニフォームの色に対する意見も関連を認めたほか、シミや汚れの付着したユニフォームの着用に対する許容度とも関連を認めた (表1)。

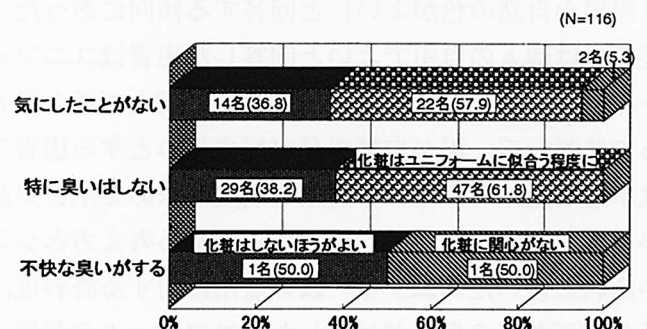


図3 ユニフォームの臭気が気になるかどうかと化粧に対する意見の関連。不快な臭いを感じたことがない患者では、化粧を容認する割合が有意に高かった (Fisherの直接確率0.015)。

表1 Fisherの直接確率検定と χ^2 検定の結果

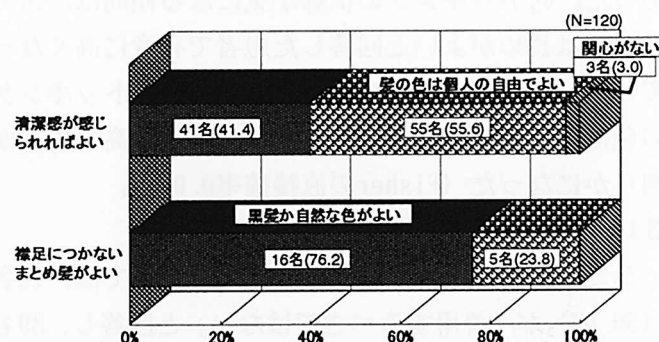
(N=127)

項 目	シミや汚れへの許容度	薬品や汗等の臭気の許容度	化粧への許容度	髪の色	アクセサリーの許容度	香水やマニキュアの許容度	口臭・体臭の許容度
性	N S	0.012	N S	(0.013)	0.016	(0.001)	0.030
年齢層	N S	(0.013)	N S	N S	N S	N S	N S
ユニフォームの色	N S	N S	0.037	(0.010)	0.011	N S	N S
シミや汚れへの許容度	—	0.028	0.011	0.024	0.024	(0.001)	0.016
薬品や汗等の臭気の許容度	0.028	—	N S	0.013	N S	0.018	(0.019)
下着が透けないための対策	(0.001)	0.017	N S	0.016	0.029	0.045	N S
化粧への許容度	0.011	N S	—	(0.016)	(0.001)	(0.001)	0.017
髪 型	N S	N S	N S	0.014	N S	N S	N S
髪の色	0.024	0.013	(0.016)	—	(0.003)	(0.001)	(0.029)
アクセサリーの許容度	0.024	N S	(0.001)	(0.003)	—	(0.001)	N S
香水やマニキュアの許容度	(0.001)	0.018	(0.001)	(0.001)	(0.001)	—	N S
口臭・体臭の許容度	0.016	(0.019)	0.017	(0.029)	N S	N S	—

N S, 統計学的有意差なし; 数値はいずれもp値を示しており、()で表示されている場合は χ^2 検定による値である。

5) 髪型と髪の色

勤務中の髪型については、「清潔感が感じられればよい」と回答した者が99名 (82.5%)、「襟足につかないようにまとめているほうがよい」という回答が21名 (17.5%) にみられた。髪の色については、「個人の自由でよい」が60名 (49.6%)、「黒髪か目立ち過ぎない自然の色がよい」57名 (47.1%)、「関心がない」4名 (3.3%) という結果になった。図4に示すように髪型と髪の色に対する考え方は関連していた。同様に、髪型とストッキングの色に対する考え方にも関連がみられ、清潔感が感じられればよいと考える場合にはストッキングの色にもこだわらないという回答が多かった (Fisherの直接確率0.012)。髪の色については、男性が「個人の自由でよい」と回答した割合が多いのに対して、女性は「黒髪か自然の色がよい」と回答する傾向にあった。髪の色は個人の自由でよいと回答した患者はユニフォームから下着が透けないための対策も個人責任と考えるのに対して、黒か自然の色が好ましいとする患者では下着が透けないための対策を病院に求める割合が高かった (表1)。さらに、髪の色に対する考え方とシミや汚れの付いたユニフォームの着用に対する許容度、薬品や汗などの臭気が付着したユニフォームの着用に対する許容度、ユニフォームの色に対する考え方は関連していたほか (表1)、ストッキングの色やスカート丈に対する考え方とも関連する傾向にあった。

図4 髪型と髪の色に対する考え方の関連。髪の色は個人の自由でよいと考える場合は髪型を規定しないが、黒髪や自然な色を望む患者ではまとめ髪がよいと回答していた (Fisherの直接確率 $p=0.014$)。

6) ピアス、ネックレス、指輪などのアクセサリー

勤務中のアクセサリーの装着については、「目立たなければ個人の裁量でよい」73名 (61.3%)、「一切身につけるべきではない」45名 (37.8%)、「関心がない」1名 (0.8%) という回答を得た。この回答には性差を認めた (図5) ほか、アクセサリーの装着に対する許容度は下着が透けないための対策、ユニフォームの色に対する考え方、シミや汚れの付いたユニフォームの着用に対する許容度、髪の色に対する考え方、化粧への許容度とも関連していた (表1)。

7) 香水やマニキュアの使用

香水やマニキュアの使用については、83名 (68.6%) が「しないほうがよい」と回答し、「目立たなければ個人の裁量でよい」は37名 (30.6%)、「関心がない」1名 (0.8%)

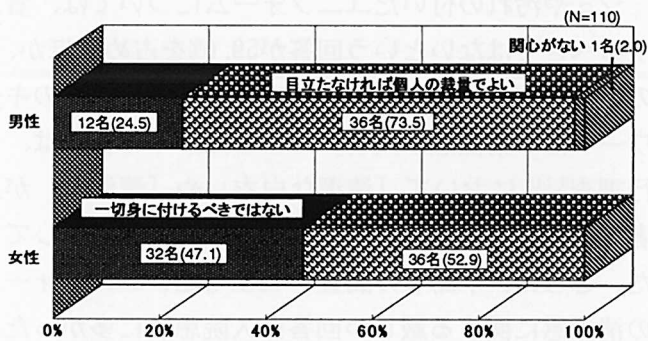


図5 勤務中のアクセサリー装着に対する意見の性差。男性が個人裁量でよいと回答するのに対して、女性では一切身につけるべきではないという回答割合が多かった (Fisher直接確率0.016)。

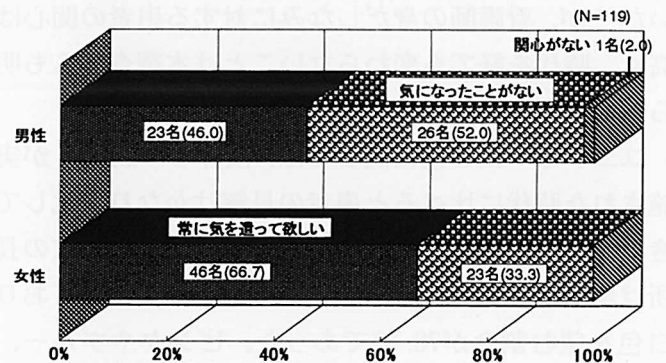


図7 口臭や体臭に対する意見の性差。男性が「気になったことがない」と回答するのに対して、女性では「常に気を遣って欲しい」という回答割合が多かった (Fisherの直接確率0.001)。

という順で回答を得た。この結果には (図6) に示すような性差がみられた。さらに、香水やマニキュアの許容度は薬品や汗の臭いの付いたユニフォームの着用に対する許容度や下着が透けないための対策、化粧への許容度、髪の色に対する考え方、アクセサリーの装着に対する許容度、シミや汚れの付いたユニフォームの着用に対する許容度とも関連を認めた (表1)。

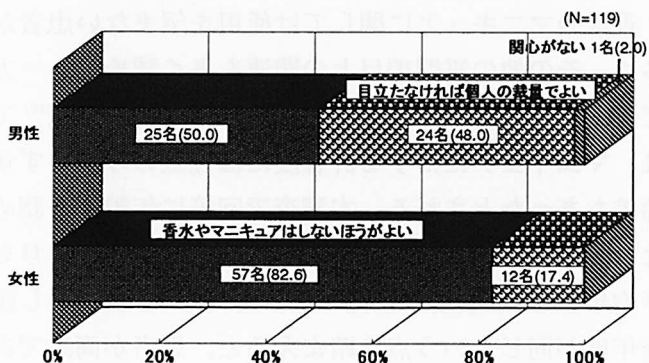


図6 香水やマニキュアの使用に対する意見の性差。男性が個人裁量でよいと回答するのに対して、女性ではしないほうがよいという回答割合が多かった ($\chi^2=14.83$, $p=0.001$)。

8) 口臭・体臭

口臭や体臭について「常に気を遣って欲しい」と回答した者は71名 (58.7%)、「気になったことがない」は49名 (48.5%)、「関心がない」は1名 (0.8%)であった。この回答には図7に示すような性差がみられた。さらに、口臭や体臭の許容度はシミや汚れの付いたユニフォームの着用に対する許容や化粧への許容度、薬品や汗の臭いの付いたユニフォームの着用に対する許容度、髪の色に対する考え方とも関連していた (表1)。

9) 自由記述

92名 (72.4%) の患者が意見を記しており、看護師の身だしなみに求めるものとして「清潔感が大切」といった主旨の回答が19件と最多であった。次に多かった主旨は「臭いは刺激になる」10件、「アクセサリーは危険」8件、「看護師は美しくあるべき」6件、スカート丈に関する主旨3件であった。

IV. 考 察

ユニフォームに対して患者が抱えている印象は、清潔度や着こなしなどに関しておおむね良好であると考えられた。これは恐らくA病院の看護師達が身だしなみに関する明文化された院内の規定を守っていたことが大きいであろう。ちなみに、廣瀬らが2002年に行った看護婦の身だしなみの規定に関する調査⁶⁾では、明文化された規定を持つ病院は回答の得られた病院の65%を占めたと報告されている。したがって、本調査結果はある程度標準的な病院における結果と受け止めても良いと考える。

身だしなみに関する患者を対象とした先行調査には、浅井らの調査⁷⁾ (入院患者143名、1970年) や、高橋らの調査⁸⁾ (入院患者46名、推定1999年)、廣瀬らの3病院での調査⁹⁾ (500名、推定2000年)、中島らの調査¹⁰⁾ (入院患者231名、2001年)、佐谷戸らの調査¹¹⁾ (入院患者60名、2001年)、松下らの調査¹²⁾ (入院患者45名、2001年)、駒井らの調査¹³⁾ (外来/入院患者107名、2002年)、橋田らの調査¹⁴⁾ (外来患者と付き添い者557名、2003年) などがある。1970年の浅井らの調査においても患者の57%はユニフォームに関心があると回答して

いた⁷⁾が、看護師の身だしなみに対する患者の関心は高く、時代を経ても変わらないことは本調査からも明らかであった。

ユニフォームの色に関しては、浅井らの調査⁷⁾が実施された時代に比べると患者の見解はかなり変化してきているといえる。浅井らの調査⁷⁾では、「白衣の長所は清潔感があること」と86.0%の患者が支持しており、白色を望む割合が78.3%であった。ピンクやブルー、グリーン、クリームなどの色を望む割合は、次点のピンクですら5.6%を占めるにとどまったという。本調査での白以外の色でもよいという回答が多かった背景には、ユニフォームの色や形状に関して看護界が率先して改革を進めていることも挙げられる。いずれにしても本調査結果から推察できることは、近年の動向として患者側も白色のイメージに象徴された外観の清楚な美しさよりも、看護を受ける上での機能性を重視しつつあるということであろう。それゆえに、我々は社会の期待に応えるべく看護の質の向上に努めなくてはならない。

スカート丈に関しても似合っていればそれでよいという寛容な結果を得ていた。この背景には、パンツスーツ型ユニフォームなど機能性のみならず美観も優れたユニフォームが開発されてきたことが挙げられ、それによりスカート型ユニフォームの着用者が減少している可能性もあるためと考えられた。しかし、女性のほうが長めのスカートを好むほか自由記述でもスカート丈に注目した回答がみられ、松下らの調査¹²⁾でも不快に思った内容の1つにスカート丈が挙がっていた。したがって、スカート型ユニフォームを着用する際には、あらゆる所作を想定した上でのバランスのよいスカート丈について、着用者各個が1度検討してみることが推奨されるであろう。

ストッキングの色に関しては、「個人の判断に任せてよい」が「白がよい」をやや上回る結果であった。スカート丈やストッキングの色、およびストッキングの伝線へのこだわりは、それだけ患者がユニフォームのトータルな美観を重視している表れでもあり、このことは下着が透けることに関しても同様である。少数ながらも患者から細かく観察されることを念頭において装う必要がある。

シミや汚れの付いたユニフォームについては、着用するべきではないという回答が59.0%を占めたほか、その他の質問項目と多くの関連を認め、自由回答のキーワードは「清潔感が大切」であった。この結果は、先行調査^{9,14)}において「清潔な白衣」や「清潔感」が患者の求める希望要件の第1位であることに一致していた。さらに、中島らの調査¹⁰⁾によると、ユニフォームの清潔感に関する厳しい回答は入院患者に多かったという。したがって、看護師のケアを受ける頻度が高い患者ほど厳しい評価を出す可能性があると予想できる。私達看護師はユニフォームのシミや汚れがいかに関心を集めているかを認識し、着用時は努めて注意を払う必要があると言える。ユニフォームは本来、機能性を重んずる程度により作業服と特殊作業服、事務服、審美性を重んずるサービス服の4種類に大別され、看護師のユニフォームは特殊作業服に該当する¹⁾と言われてきたが、今後はサービス服としての意識も高めていかねばならないと考える。

香水やマニキュアに関しては使用を望まない患者が多く、その他の質問項目との関連も多く認めた。一方で性差も認められる結果となった。中島らの調査¹⁰⁾では、マニキュアに対する許容度には性差のみならず年齢差もあったとされる。本調査で回答に年齢差を認めなかった理由は、患者の年齢層が中島らの調査よりも平均年齢が7.2歳若かったことが考えられた。しかし調査年度が同じという点を踏まえると、患者が高齢であるほどマニキュアに対する見解はより厳しくなることが推測できる。また、香水については先行調査^{9,11)}でも過半数が使用を望んでいなかった。本調査では性差が生じており、その理由は不明である。社会通念として男性のほうが身だしなみ全般に寛容であることで説明できるのかもしれないが、患者の半数は女性患者であることと本調査の自由記述の結果を踏まえると、性差にかかわらず臭いが有害刺激になることを認識し、香水の使用を避ける必要がある。上述したことは、口臭や体臭、薬品や汗などの臭気が付着したユニフォームの着用についても該当する。口臭については、勤務中の食事の留意するほか、チェッカーを使用するなどの検討も必要であろう。臭気がついたユニフォームをある程度許容できると回答した者は過半数を占めたこ

とは、看護師の多忙さに配慮してくれた結果とも解釈できるが、好意に甘えるべきではないことはいうまでもない。

化粧については、ユニフォームに似合う程度を好むという回答であった。一方で、1名の患者に限定されるものの、ユニフォームの臭気を感じた患者は化粧はしないほうがよいと回答していた。廣瀬らや佐谷戸らの調査^{9,11)}と異なり、化粧への許容度と年齢層は関連を認めなかったが、この理由も本調査における患者の平均年齢の低さで説明がつくと考えられた。したがって、化粧品の香りも高齢者にとっては刺激となりうる可能性を鑑みて、勤務中の化粧品は香りのきつくないものを選ぶ方が無難であろう。そして、キーワードである清潔感を打ち出すには透明感のある仕上がりを中心掛ける必要があるだろう。

髪型に関する結果は、佐谷戸らの「仕事に差し障りがなければ良い60%」¹¹⁾を上回っており、社会的に多少自由が認められつつあるようである。しかし一方で、黒など自然の髪の色がよいと回答する患者ではまとめ髪を望む割合が多く、この傾向は本調査の前年に行われた廣瀬らの調査で、患者の51%が「ショート、またはまとめあげるのがよい」⁹⁾と回答していたことに類似する。本調査は外来患者を対象にしており、入院患者に比較すると食事や移動・移送などの介助を受ける機会は少ない。そのため、まとめ髪が看護師と患者双方にとって利便性が高いことまで思い至らず、「清潔感が感じられればよい」と回答した可能性も考えられる。したがって、髪型に関しては、従来通りまとめるかもしくはスプレーなどを使用して、崩れにくい整髪を行うことが推奨されるであろう。

髪の色は、個人の自由でよいとする回答が49.6%、黒など自然の色がよいとする回答が47.1%であり、回答に性差が認められた。個人の自由でよいとする回答は先行調査^{9,12)}よりは高くなっていったため、確かに「茶髪が社会的風潮として受け入れられてきた可能性も考えられる」¹⁵⁾。性差が生じたことは、「女性会社員の茶髪に対し男性60.9%、女性74.5%が認める回答をしている」¹⁶⁾というデータから説明できるのではないかと考えられた。一方で、自然の色をよしとする割合は、先行調査¹¹⁾と同じ結果であり、髪の色とその他の質問項

目との関連も多く認めた。したがって、看護師にとっての茶髪が自身を明るく活動的に見せるための手段^{11,13,15)}であったとしても、患者は必ずしもそのように感じていない場合もあることに留意する必要がある。髪を染色する場合は、控えめな色を心掛けて清潔感とのバランスをとることが望まれる。

アクセサリ装着に関しては、目立たなければ個人の裁量で良しとする意見が過半数を占めたほか、性差もみられた。先行調査^{8,11)}では、指輪やピアスをつけることに反対する患者が多く(23.9%⁸⁾、42%¹¹⁾、その理由は「プライベートを象徴する装飾品は必要なしとする見方と、白衣や看護婦のイメージに合わないとする見方」⁸⁾であったが、本調査では男性患者に容認する回答が多かったため、全体として許容度が高くなったものと考えられた。しかし、目立たなければよしとする今回の結果は、ピアス・ネックレス・指輪を一括してアクセサリ装着の是非を尋ねたことによるものであり、アイテムを1つずつ尋ねた場合には回答が変化した可能性がある。さらに、患者側からみれば、髪を留めるピン・ゴムやリボンなどもアクセサリと見なされていた可能性が高い。自由記述ではアクセサリは危険⁹⁾という回答が挙がっていたことを踏まえると、アクセサリの装着には慎重である必要があるだろう。

本調査結果を総括すると、患者が看護師の身だしなみに求めるキーワードは清潔感であり、看護師は患者の立場から自身がどのように見えるのかを常に考える必要があると考えられた。人はみかけで判断されがちであるからこそ、看護師として患者に信頼感と安心感を与えられる身だしなみが求められるといえる。換言するならば、美しい身だしなみも患者にとっては提供されるケアの1つに他ならないのである。しかも、看護師の姿を通して、患者はその病院の組織体制を含めたイメージをも受け取っていることになる。村松は「ナースは身だしなみで個性を発揮する必要はない」¹⁷⁾と述べているが、同感である。社会的にも個人主義が肯定されている昨今だが、専門職としての身だしなみと個人のおしゃれを同義ではないと考える。中西らが退院患者に対して行った調査¹⁸⁾では、入院10日未満の患者からの接遇態度に関する要望が多かったため、「入院後の10日間で看護師に対する印象が決まってしまう」

と指摘している。看護学生や新人看護師へは、以上の身だしなみに関する留意事項とその動向について職業教育としてきちんと伝えていく必要があるだろう。

V. おわりに

看護師の身だしなみに関する患者の見解について、外来患者を対象に調査した。身だしなみに関する患者の見解は、ユニフォームの色やスカート丈、化粧、髪型、髪の色などの項目で、従来に比較すると看護師の自由を許容する割合が少し高くなっていることがわかった。しかし、香水や薬品の臭い、口臭など臭いに関する項目やアクセサリーに関する見解は厳しく、職業人としての清潔感ある身だしなみを求められていることに変わりはない。ただし、本調査の限界として、入院患者を対象に含めなかったほか、データがやや古いことが挙げられる。身だしなみに関する調査は2003年以降は余り報告がないため、調査方法に改善を加えて今後も調査を続けていきたい。

VI. 謝 辞

本調査を行うにあたり、調査にご協力頂きました患者の皆様にお礼申し上げます。また、調査に際してご高配賜りましたA病院の皆様にも厚くお礼申し上げます。

VII. 引用文献

- 1) 看護学雑誌編集室：白衣の世界に革命を；ファッション・デザインの観点から、看護学雑誌、34(4)、26-31、1970
- 2) 杉宮克子：駆け足で振り返る看護衣の歴史、Nurse eye、14(1)、21-24、2001
- 3) Kalisch, B.J., & Kalisch, P.A.: The changing image of the nurse, 13, 892, Addison-Wesley Publishing Company, California, 1987
- 4) 陣田泰子：ユニホームの自由化、看護、56(15)、52-53、2004
- 5) 榮木実枝：ナースキャップ廃止から新ユニフォームの導入へ；機能性を重視して、脱白衣、看護管理、12(11)、870-874、2002
- 6) 廣瀬規代美、奥村亮子、青山みどり、中西陽子、二渡玉江、林陸郎：看護婦の身だしなみの規定に関する調査、看護管理、12(10)、804-805、2002
- 7) 浅井保子、石田くみ子、石原広子、後藤央子、榊原多恵子：看護婦の制服についての考察、看護学雑誌、34(4)、39-43、1970
- 8) 高橋愛、石井孝子、高橋真紀、鈴木晶子、前田洋子、佐々木美奈：看護婦の対応や印象に関する調査、中通病院医報、38(1)、76-78、1999
- 9) 廣瀬規代美、奥村亮子、秋山恵、内田真理子、斎藤悦子、佐俣愛里、ほか：看護婦の身だしなみに関する研究、看護管理、11(6)、445-451、2001
- 10) 中島多津、山本千代、龍田しづか、西岡美作子：入院患者からみた看護職員の接遇－アンケート調査結果からの報告－、高知県立中央病院医学雑誌、29(2)、31-37、2002
- 11) 佐谷戸優子、久保田香、山岸晃子：身だしなみに関する研究－看護婦と患者の意識の違いについて－、長野赤十字病院医誌、16、113-116、2003
- 12) 松下聡子、真壁節子、及川弘美、久米田まゆみ、鈴木美智子、相澤綾子、ほか：看護師から受ける長期入院患者のストレス調査、仙台市立病院医学雑誌、24、143-149、2004
- 13) 駒井初香、佐藤とみ子：看護師の茶髪の印象と許容度－患者と職員の立場からの比較－、日本看護学会論文集（看護総合）、34、69-71、2003
- 14) 橋田弘子、藤澤千恵美、寺田貴子、藤川イツエ：外来看護師の接遇対応～看護師の自己評価と患者評価の比較～、八千代病院紀要、24(1)、36-40、2004
- 15) 山田真佐美、宮本ありさ、桐野由起、沼波勢津子：看護学生の茶髪はどこまで許せるか？－看護職員へのイメージ調査より－、日本看護学会論文集（看護教育）、32、104-106、2002
- 16) 東京太郎：オフィスファッションの許容度実情データ；月刊ビジネスデータ、日本実業出版社、15、68-71、2000
- 17) 村松光子：できていますか？身だしなみ－ナースのおしゃれは清潔感が大事－、看護学生、50(13)、24-25、2003
- 18) 中西香世子、坂口みつる、豊留広美：病棟看護師

の接遇態度に対する患者および看護師の認識調査、
共済医報、52巻Suppl、143、2003